

母の記憶に生の実相を照らし出す人

貝塚津音魚第二詩集『魂の緒』に寄せて

1

人はどこからやってきて、どこに留まり、どこに向うのだろうか。そんな深い問いを胸に秘めて多くの人は、日々自らの課題を探し求め、それに立ち向かっているのだろう。ある意味で詩とはそんな問いを突き詰めて考え、赤裸々に答えようとする根源的な試みであるのかも知れない。

貝塚津音魚さんもまた、そんな問いを心の奥底で粘り強く問うて、生きて来られたのだろう。貝塚さんは団塊の世代で三人の子の父であり、大手メーカーで定年まで品質管理の第一線で活躍されていた。海外出張も多かつたらしく視野も広く、物造りのプロフェッショナルだった。貝塚さんの趣味の写真や書道も拝見する限り、相当なレベルだと分かる。また菅原道真や石川啄木が好きで短歌の実作者でもある。父上が大工だったこともあり、手先が器用な方のように思われる。しかしそんな貝塚さんがなぜ物造りと同様に心の在り方に強い志向性を持つ詩作を開始していたか。二〇〇七年に刊行された第一詩集『若き日の残照』には四十篇ほどの詩篇が収録されていて、貝塚さんは学生時代から詩歌に強い関心を持つ

ていたことが分かる。詩人では島崎藤村、石川啄木、西脇順三郎を愛読していたとのことで、現役の詩を書く詩人たちとの接点もあまりなかったらしい。しかし地元周辺の上越の詩人や画家などの芸術家たちとの交流の中で、書き溜めていた詩篇を発表することを決意したという。貝塚さんはたぶん隠れて一人で学生時代から短歌や詩作を続けていたのだろう。そしてよきビジネスマンやよき父を演ずるだけでなく、いつしか一人の人間としての深い思いを宿した詩篇が溢れてきたのではないか。そして発表の機会や未知の現役詩人たちとの交流を求めていたのだと思われる。第一詩集を刊行した後に、地元で昨年詩集『神の指紋』（コールサック社）を出版した石下典子さんとも知り合い、山本十四尾さんを紹介されて詩の教室に参加し、詩誌「衣」の同人になることで現役の詩人たちと接することが出来た。その頃にコールサック社が出版した詩集も数多く貝塚さんは求めてくださり、きつと現役の詩人たちからも多くを学んで血肉にしていたのだと思われる。そしてコールサック社が企画した『大空襲三一〇人詩集』や詩誌「コールサック」にも参加し、その詩運動の重要さを貝塚さんは理解して支援をしてくれている。

第一詩集の中で最も印象に残ったのが、次の詩「母さんの記憶」だった。

母さんの記憶

母さん
もうすぐ夕陽が落ちますよ
昔 二人で眺めた
夕陽を覚えていますか
紅に染まった二人の顔
母さんの手をしっかりと握り締めた陰が
何処までも続いています
この瞬間が永遠に続くような気がしました
母さんは忘れてしまったのですか
心をなくしてしまった
よこ顔を見ていると
涙が ポロポロと
落ちてしまいます
何もかも
遠い昔に置いてきて
しまったんですね
しかし、その顔は
子どもそのものの、何の欲もない
仏さんのようですよ
母さん

この詩を読むだけで、貝塚さんが母親とのよき思い出を原点として抱えながら、母に感謝して生きてきたのが伝わってくる。母と二人で見た夕陽の美しさは、最も美しい記憶として刻まれているが、現実の母は記憶が揺らぎ始めてその記憶をもうや甦らせることはできないようだ。貝塚さんは、生きながら緩慢に精神が壊れていく母の存在の喪失感を悲しみながらも、無垢になつていく母を見守り、何とか現実を受け入れようとしてこの詩を書いたのかも知れない。そのありのままの姿を受け入れて、母を「仏さんのようですよ」と記すまで相当な内面の格闘があつたに違いない。しかしそんな格闘を経ても母の中に仏を感じたと素直に言える貝塚さんは、真に親孝行な息子だろう。母が病院ではなく家で死にたいという希望を聞き入れて、退職後に母を介護し最期まで看取つたと聞いている。父を若くして亡くしたこともあり「母の記憶」は、貝塚さんにとっても最も大切なことであり、それを「詩の記憶」として甦らせたいと願つたのかも知れない。

2

新詩集『魂の緒』は四十五篇の詩が収録されている。四章に分かれていて一章「雪虫」十六篇、二章「結」十六篇、三章「団塊列車」七篇、四章「鐘」六篇から成っている。一章「雪虫」は母についてだけ書かれた詩篇だ。母が亡くなるまでの数年間にこれらの詩篇は溢れるように書かれた。母と共に

生きた記憶を残すために貝塚さんにとって詩作が必要である時間が到来したのだろう。きつと母の存在の喪失感が、詩神を招きよせてしまったのだ。詩神が母の最期を通して貝塚さんに染み渡って来たのかも知れない。

母ひとり

心不全で心臓の鼓動が速くなったと呼びつけられる
食も細くなり

便所の中で倒れたと言っては駆けつける

「おら 今年の夏まで持たぬ命」と嘆く点滴の日々

口では「おら いつ死んでも良いんだ」と強がり言って

死の恐怖と壮絶な戦いを続ける母

身の置き所のない

心の抛り所のない母

全てを拒否し我儘のし放題

歩くのもやつとの身にて

散々いたぶり気晴らしに

荒ぶる言葉におののいて

子どもたちに刺さる矢のつぎで

母の姉妹たち戸惑いて

母の死の恐怖を知らぬ子どもたち

真夜中

実存的な在り方だと読む側に突きつけてくる。その意味でも生の実相を直視するこの詩は、とても優れた詩だと私は考え、貝塚さんの代表的作になるだろうと思う。

最期

ああと 妻が叫ぶ

手から水が零れるような

最期

母の温もりが この世から

徐々に消えてゆく

何もない静寂の中の

静かな瞬間

遙か遠くに 明かりが

小さく小さく消滅する

宇宙の星のように

悟りを開いた

安らかな魂の息の緒が

絶えた

この母の最期を看取った詩は、「母の温もり」がこの世から消えていく悲しみを絶唱している。貝塚さんにとって母とい

台所で冷や飯に納豆ぶっかけ湯をかけて
暗い闇夜に引き込まれまいと跪く性
ひたすら身をよじり生きようとする形相は
命を繋ごうとする人間の生への執念か
今夜も

台所に母ひとり

闇夜の中にその執着の目が光っている

この詩「母ひとり」を読むと、貝塚さんは愛する母であるが、母を一人の他者としてリアルに見ていることが分かる。人は有限な存在で、たとえ母であろうが死にゆく存在であり、例外はありえない。貝塚さんは「死の恐怖」を感じて異常な行動や言動をすることを全て受け入れている。けれども母の変貌振りを冷静な視線で書き記している。良き息子でありながら、人間の心身が少しずつ壊れていくさまを物作りのプロが記録しているように凝視していることが分かる。最期まで寄り添い看取することは、綺麗ごとではなく、きつとこのようなある種の冷徹さがなければ、精神的に堪える事ができなかったと私には感じられた。母は貝塚さんをきつと誰よりも信頼していたのだろう。それゆえに全てを貝塚さんに委ねたようにも思われる。「台所で冷や飯に納豆ぶっかけ湯をかけて」生き続けようとする「生への執念」や「執着の目」は、単に母だけの在り様ではなく、生に執着する一回限りの人間本来の

う存在は小宇宙であった。母と貝塚さんは目に見えない臍の緒で繋がっていた。母の最期の息が終った時に、母と自分を繋いでいた「臍の緒」が切れて無くなってしまったことを痛切に感じたのだろう。しかしこの「魂の息の緒」から「母の息」が亡くなったも、母との「魂の緒」は貝塚さんに永遠に生き続けるのだという思いで、貝塚さんは詩集タイトルを「魂の緒」と名付けたのかも知れない。母の美しさも醜さもその生の実相のすべてを抱えこんでこの詩を試みようとしている。また貝塚さんは母が最期に仏のように悟りを開いて旅立っていったと記している。母との絆が深くなればこのような想いが生まれるはずはなかった。母とはこのように子に計り知れない影響を与え続ける存在だということはこの詩は刻んでいる。一章のタイトルでもある「雪虫」は美醜を超えて、母が「雪虫」になって聖母のように自分を見守っていてくれていると、貝塚さんは願っているのだろう。

3

第二章「結」十六篇の中心テーマは、助け合って生きるという自分の暮らす地域の関係性の重要性を問い直している詩篇だ。冒頭の「結 I」にはその問いが貝塚さんの問いであるだけでなく、現在の日本の各地域で崩壊しつつある共同体の切実な問いでもあるのだ。

萱屋根が

田畑が

凄い速さで壊れていく

無くなってゆく

昔も今も 里山は

人々の心のふるさとだった

昔 萱屋根も田畑も雪下ろしも

結^{ゆい} によって

力を合せ 助けあって

困難を乗り越えてきた

今 村には

老人ばかりが残り

結 は根腐れようとしている

貝塚さんは、多くの地域の共同体がその場所で生き続けられたことの要因として、里山を大切に利用してきた先祖の知恵と、人びとが助け合う「結」の心を指摘している。

「結」とは地域の関係性を支える助け合う心として積極的に再評価すべきだと考えている。その「結」が「根腐れようと

人々は喜び悲しみにつけ祠の前で祭りを開く

人を慰め勇気づけてくれる深山の靈魂に対し

歌い踊りお神酒を捧げる

自然の恵み 災害 喜び 疫病のあらゆる森羅万象につ

いて

祠を通して畏敬の念と感謝の念を捧げる

それが昔からの習わしなのである

そこには理論や心理では解けない謎がある

曖昧さが沢山ある

そこが人間の逃げどころ 抛り所である

里山はいまも人々の心のふるさとだ

私の暮らす柏にも以前は小さな里山があった。里山に降った雨は、麓に湧き水となって小さな池を作り、毎朝水を汲む人びとがいて喉を潤した。水辺には多くの四季の野草が咲き、十二^{ジュウニ}単^{ヒトエ}という珍しい野草の花もかたわらに咲いていた。また小山の周辺には何種類もの木苺が花を咲かせ実をつけて、毎年のささやかな収穫が楽しみだった。梟の鳴き声も時々聞こえていた。しかし人が増えて近くに住宅が増えくると、湧き水に菌が混じるようになり、飲み水には適さなくなつた。それ以前に里山の四方から家が増えてきて山の地力も衰えて木々も立ち枯れていった。里山の命が殺がれることにいたたまれなく、私はその場所から引越してしまった。東京下町

している」という危機感がこの詩を成立させている。個人の自立や欲望を肯定し促してきた結果が、「助け合う心」を速くに追いやってしまったのではないか、という反省を自らにも突きつけている。人間も生あるものである限り自然の一部であり、自然の恵みや脅威を知恵として学んでいかなければならない。身近な里山についてもその大切さが分からなくなり、その恵みに感謝する心も無くしていった。そんな危機的な現状に対して貝塚さんは、もう一度「結」という地域の関係性を通して自然と共生していく暮らしを考えていこうと提起しているのだ。そのことをより深く考えようとしている詩に「里山は」がある。

里山は

里山は深山と里の間にある

深山には靈魂が住んでいる

里には人間の淋しさが住んでいる

里山は靈魂と人の悲しみが混ざり合い浄化するところ

人は里山に悲哀を捨てに来る

そうして

里では得られない獲物や食べ物を与えられて

人は深山の靈魂に慰められて里に戻って行く

里山と里の境には祠^{ほこ}がある

育ちの私は、自然を知らなかったが、この里山に日々接して里山の重要性に気がつき始めていたのに本当に残念だった。東京への通勤圏であるから仕方ないという諦めが、貴重な里山の自然を二度と戻らなくさせてしまった。貝塚さんのこの詩を読んだ時に私は、里山が持っていた地域の共同体を支えてきたある種の神秘的な力を教えられる思いがした。「里山は靈魂と人の悲しみが混ざり合い浄化するところ」という行は、多くの含蓄ある示唆を与えている。深山と里との中間にあり「人は里山に悲哀を捨てに来る」という。その里山を粗末にし省みなくなるといふことは、人は悲哀を捨てに行く場所が無くなることになる。「曖昧さが沢山ある／そこが人間の逃げどころ 抛り所である」という指摘は、人が人を超えた大いなる自然に畏敬の念を持ち、その恵みに感謝をし、謙虚に生きることを取り戻す必要性を告げているのだと考えられる。その意味で貝塚さんは、「結」の根底に里山を共有する共同体を担う人々の「心のふるさと」を問うているのだ。里山という「心のふるさと」を一緒に取り戻したいという切なる思いをこの詩は物語っている。

第三章の「団塊列車」七篇は、地域の共同体を超えた社会性の強い詩篇だ。団塊の世代の若者たちが都市に向うために乗った「長き旅を終えた列車」を思い起こしたり、地元空襲と東京大空襲などの空襲詩や広島原爆詩などに果敢に挑戦している。第四章「鐘」六篇は、東欧や北欧に旅行をした

時の詩篇だ。最後に詩「運命の二人」を引用したい。

父母の存在を慈しみ、地域の共同体と里山の重要性を共有する方々にはぜひ読んで欲しい。また定年退職をむかえた団塊の世代の人たちにもぜひ読んでもらい、地域を大切にする「結」を貝塚さんと共に一緒に考えてもらいたいと願っている。

遠く
祈りの晩鐘ばんしやうだけが聞こえてきます

運命の二人

何処までも続く水平線

あるのは空と雲ばかり

不毛の地で父と母は

泥にまみれ 汗にまみれ

限りなく続く水平線に向かつて

命の尽きるまで

地を耕し続けた人生でした

やがて 水平線の切れる所

長い夏の夕陽の弔いを受けて

この世を去って行きました

名も無い二人の最期でした

参列者も無い弔いでした

しかし 二人の植えたポプラの長い陰が

長く長く何処までも続いていました